

「信じて帰る」

水谷憲牧師

聖書 ヨハネによる福音書 4章 46-54節

イエス・キリストがこの世界で初めに表された「キリストとしてのしるし」は、イエスの故郷であるガリラヤ地方のカナという町で行われました。婚宴の場面で、宴席に出すぶどう酒が切れたので、6つの水がめになみなみに満たした水を、上等のぶどう酒に変えられたというものでした(ヨハネ2:1-11)。その後イエスはエルサレムに上り、商売の家と化していた神殿を清めたり(ヨハネ2:13-22)、人々といくつかの問答をしたりした後、再びユダヤ地方を離れ、サマリアを通過して故郷であるガリラヤに帰ってきました。今日の聖書は、イエスがガリラヤに帰ってきて、再びカナに行かれた時の話です。

そのカナのイエスのもとに、約30キロ離れたガリラヤ湖北部のカファルナウムという町から一人の男がイエスを訪ねて来たというのです。彼は王の役人でした。彼の息子が病気になって死にかかっていたのですが、そこに噂になっているイエスがまたガリラヤに帰って来たらしいという話を聞きつけ、そのイエスに「カファルナウムまで一緒について来てほしい、そして息子をいやして欲しい」と頼みに来たわけですね。考えてみれば、王の役人をしているほどの人物が一介の田舎の大工に頼みごとをする、しかもそんな権力のある人物であればイエスの方をカファルナウムに呼びつけることもできたであろうに、自らわざわざカナまで30キロの道のりをやってきたわけですね。それは大変だったでしょうが、しかし彼は死にかけている息子を前に居ても立ってもおれなかったんです、きっと。イエスという不思議な業をなされる先生がカナに来ているのか。なんとかして頼めば、息子も治してもらえるかもしれない。行って、必ずその人を連れてきてやる。息子よ、がんばって待てるんだぞ。死ぬんじゃないぞ。彼は必死の思いでイエスのもとに向かったことでしょう。

もちろん、彼の周りには「あなたほどの方が自らお出向きにならなくても・・・ナザレのイエスの噂は聞いておりますが、そんな者に頭を下げるなど・・・」いろいろと言う人もいたでしょう。しかし彼は「それもそうだな、ワシが自ら出向かなくてもよいかもしれぬな」などとは考えませんでした。そんな恰好つけている場合ではなか

ったからです。私たちが本当に誰かの助けを必要とするとき、そんなつまらないプライドや世間体、他人からの評価をいくら気にしても何の足しにもならない、そんなものに心悩ませているうちは、私たちは本当に助けを必要としているとはいえない、本当に困っているとは言えないということなのかもしれません。今、日本の副総理をやっている政治家が昔、地元で初めて選挙に出た時、彼は大きな財閥の御曹司でしたから、街頭演説で開口一番「下々の皆さん」と口走ってしまい、ひんしゆくを買って、初めての選挙は落選したそうですが、そういう感覚は今でも健在だそうで、つい数年前も、「国会議員の誰それは部落出身で、あんな奴は総理にさせるわけにはいかんわなー、わっはっは」などと平気で言っていたんだそうです。「俺はお前らとは身分が違う」というプライド丸出しのそういう言葉からは、自分に都合のいい政治しかするつもりがない、本当に私たち庶民のための政治をしようという気持ちを感じられない。それに比べたら今日のこの王の役人の何と謙虚なことか。感心します。今日のこの王の役人の男の姿からは、私たちはどうなのか、私たちはどれほど真剣にキリストの助けを、キリストの救いを求めているのか、つまらないプライドや社会的評価に振り回されて大事なことを見失ってはいないか、ということが問われているように思うわけです。

このように、今日のこのカファルナウムの役人である男の姿には、私たちは学ばされる場所が多くあるように思いますので、今日はこの男の姿から私たちは3つのことを学ばせてもらいたいと思っています。ひとつは先程お話ししたように、私たちは「キリストをどれほど真剣に求めているか」、キリストによる救いを求めながら、私たちはこの世的な様々な評価やプライドに惑わされているのではないか、キリストの救いというものは、例えば12年間も出血に苦しんでいた女性が律法違反を承知で人ごみの中に出て行き、「この方の衣にでも触れればいやされる」との思いでイエスの衣の端を必死に握り締めたように、社会的な利益や評価、そしてプライド、そんなものをすべてかなぐり捨てたところではじめて与えられるものだという事です(マルコ5:25-34並行)。

そうして2つめは、この男がイエスのもとにたどり着いてイエスに子どもの救いを願った時の姿です。イエスはこの役人がなりふりかまわず救いを求めてやって来たにもかかわらず「あなた方は、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じな

い」(ヨハネ 4:48)と言われました。これはこの役人の願いをはなから拒絶するような厳しい言葉として、この男には聞こえたことでしょう。確かにこの言葉はこの男にとって凶星だったのかも知れません。なぜなら、イエスがカナの婚礼の席や、あるいはエルサレムでなした様々な不思議なしるしや業を見聞きした者がいて、それを伝え聞いたからこそ、この男はイエスに子どもの命を託そうと決意したに違いないからです。イエスがそのような不思議な業をなしていなかったなら、イエスがただ神の国を言葉をもって述べ伝える宣教師というだけの人物であったなら、この男もイエスに子どもを救ってもらおうなどとは考えなかったかもしれない。イエスはそこを問われた。あなた方のそのような目に見えるものしか信じない姿は信仰とは言わないのだと。

しかし、彼は諦めなかった。彼はそのようなイエスの言葉につまずいて逆上したり、「ああそうですか」と諦めたりはしなかったのです。今ここで諦めてしまったら、子どもの命は滅びてしまう。彼は旧約聖書のカインのように激しく怒って顔を伏せるようなことはしませんでした(創世記 4:5)。「主よ、あなたのおっしゃることはごもともです。しかし、小犬だって主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです」(マタイ 15:27)とイエスに食い下がった女性がおりましたが、まさにそのように諦めずに求め続けたのです。キリスト教が私たちに伝えようとしている大きなメッセージの一つは「どんな逆境にあっても決して諦めない」ことです。そのことを今日こどもでもこの役人の男は改めて私たちに教えてくれています。

しかし、今日のこの聖書では、この役人の彼がそのようなイエスの厳しい言葉につまずくことなく、必死に「主よ、子どもが死なないうちに、おいでください」(49)と願ったにもかかわらず、イエスはさらにこう言われたのです。「帰りなさい。あなたの息子は生きる」(50)。私だったら、必死にイエスに願った末にそんなことを言われただけでは、とてもおめおめと帰ることなどできないかもしれない。イエスの首に縄を付けてでも引っ張っていくか、イエスが来てくれるまでひれ伏したまま、そこをテコでも動かないかもしれない。だって息子が死にそうになっているんです。一刻を争うほどに切迫した状況なのです。しかし、今日のこのカファルナウムの役人である彼は、そのイエスの言葉を信じて帰って行ったというのです。私たちがこの男の姿に学ぶべき 3 つ目は、この男のこの「イエスの言葉を信じて帰って行っ

た」という姿であります。

「あなたの息子は生きる」との言葉をもらったとしても、その言葉にはこの世的には何の保証もないわけで、それだけでまた来た道を帰ることは、彼にとってどれほど辛いこと、不安なことであったでしょうか。しかし信仰とはそのようなものなのかもしれない。イエスの言葉のみを信じて、イエスの下さる言葉に込められた力のみを信じて生きてゆく、それはこの世的には非常に不安定な心持かもしれないけれども、私たちがキリストの言葉の力に信頼してそのように歩いてゆく時にこそ、神の御力はきっと働かれるのだらうと信じています。私たちも、言葉だけでは確かに不安だけでも、でもそこを信じて、勇気を出して帰っていくことのできる者となっていきたいと思います。